

「りそな キッズマネーアカデミー」の軌跡



株式会社りそなホールディングス
執行役 有明 三樹子氏

発足のきっかけ

「りそなキッズマネーアカデミー」は、2003年の公的資金注入がきっかけとお聞きしています。公的資金注入というピンチが改革を進め、銀行のサービスの本質を考えるなかで、「りそなキッズマネーアカデミー」は、どのように発案されたのですか？

有明 公的資金注入で多大なご心配とご迷惑をおかけしたことから、当社グループを各地域で支えてくださっている皆さまに、わたしたちとして、何か恩返ししたいという想いがありました。

社外から来たトップや役員も含めて、まず、現場に行って社員に話を聞きました。またアンケートをとりアイデアを募集したところ、子どもたちにお金のことを教えたいという、たくさんの方が集まりました。子どもたちが自分の将来のためにお金に興味をもつことは大切なことですし、いずれお金のことで何か相談があれば、身近な銀行としてわたしたちがお役

に立てるのではと考えました。

―そのとき、ご自身はどのような役割を？

有明 実は当時、前職の証券会社で、金融リテラシーを提供する事業をやっていました。多くの方に金融リテラシーを持ってもらい、自分の夢を叶える人を、ひとりでも増やしたいと考えていました。

ちょうどそのころ、りそなの事務局から、お金のことを教えたいという声社員から上がってきたけれど、どうしたらいいだろうかと声がかかり、提案を出すなかで、「来て、やってみたらどうか」ということになったのです。

「りそなキッズマネーアカデミー」のカリキュラムは、社員の皆さんが4カ月かけて作ったとか。どのようになさったのですか？

有明 細部にまでこだわって作りました。発表されている教材があり、それらを適当にカスタマイズしたほうが簡単ですが、急いで作りあげる

のではなく、議論を重ねながら1から自分たちで作りました。「こらやって一つひとつ考えて真剣に向き合う。これが銀行なのだ」と感じました。

「リテールNO.1」を目指す御社の特徴ですね。何人くらいで、始めたのですか？

有明 プログラム作りのボランティアは、東京、埼玉、大阪のそれぞれエリアから5〜6人ずつ、合計200名ぐらいが集まりました。そのメンバーが、仕事を終えて、夜7時に各地域の本部に集まり、議論したり、土日に集まって、何度もハーサルをしました。

「忙しい時間を割いて、すごいエネルギーですね。そのモチベーションは何だったのでしょうか。」

有明 自分の時間を使うことを、惜しまない。みんな、熱心に取り組みました。しかし、「りそなキッズマネーアカデミー」の準備を進めるとなると、定時退社した後に集まって

作業したり、早目に帰らせてもらうことが重なったので、当時の現場の支店長から、「あいつらは、なにを遊んでいるんだ」という声があがったのです。

「そういう声も当然あるでしょうね。社員さんには辛いところです。」

有明 そうなんです。日中の業務との両立が難しくなり、来られなくなったメンバーもいました。

最終的に残った各社30人ずつくらいのメンバーが、最後までしっかり仕上げてくれました。当初、2005年は東京、埼玉、大阪の3か所であり、2年目も3か所で開催し、2007年には、全国に広げていこうという動きのなかで、批判的な声を一喝してくださったのが、経営トップでした。

「まさに最強のサポーターが現れたのですね。」

有明 全国の支店長が集まった支店長会議の席で、当時の社長が「まさか、ここに座っている皆さんのな

かで、『りそなキッズマネーアカデミー』という大変意義のある活動をしている社員に向かって、遊んでいるんじゃないか、という声を投げかけるものはいないと信じている」とメッセージを発してくれました。

「何よりの後ろ盾ですね。その後の変化は？」

有明 ガラッと雰囲気が変わりました。参加支店が一気に増えて、いまでは210か所、全国で、夏休みのシーズンに活動しています。参加者の子どもたちは、3500人から3700人で、応募総数は7500人を超える状況です。

「開始されて12年、中間管理職の方も含めて、取り組みへの理解は広がりましたか？」

有明 いまや、体験者が支店長になっていきますから、実施するのが当たり前になっています。「りそなキッズマネーアカデミー」は、1年目から3年目までの若手社員が中心になって実施しており、子どもた

ちや親御さんにも、とても喜んでいただけることが社員の達成感につながっています。毎年、それが循環し、現在では全社員がその大変さも理解しているので、不平不満が出ることはもうありません。

新たな取り組み 「伝わるカププロジェクト」

「『りそなキッズマネーアカデミー』の発足から、その歩みを見てこられた訳ですが、これらに向けた活動は、何か進めていらっしゃいますか？

有明 公的資金の完済まで、わたしたちの最大のミッションは、借りたものをお返しすることが全員共通のベクトルになっていました。完済の後、何が共通ベクトルなのかが課題です。

その中で、昨年の7月から始めたのが、「伝わるカププロジェクト」。社内から参加者を募って、会社の魅力在世の中に伝えていくとはどういうことなのか、「伝わる」ために、何をしなくてはならないのかを議論し

ています。とりわけ、第一線でお客さまに伝えていく社員の意見を大切にしよう、始めました。

—どのように進めていらっしゃいますか？

有明 呼びかけに、全国から50名強の社員が手を上げてくれました。支店長の推薦をもらったメンバーが、月に一度集まっています。初年度の最終発表会では、かなり辛辣な意見もたくさんありました。

—辛辣といえますと？

有明 例えば、商品のネーミング。現場でお客さまに接している社員には、本社から「決まりましたので、このように案内してください」と通達が来るだけ。その名前を、「現場から意見を聞いて決めてください」と言うのです。目の前の社長に向

かって、「東さん。この名前をどう思うかと支店の社員に電話してみてください」という発言があったときには、社長も私も笑いながら「これはすごい」と（笑）。

—経営陣への信頼がないと、なかなか言えないですね。そうした意見は、どうなさるのですか？

有明 基本的に、経営陣が、提言は全部採用する方向で動いています。「言ったらやってくれる」という成功体験が、社内に伝わるのが大事だと思います。第2期も募集するつもりなので、「参加したい」という輪が、広がってほしいと思っています。

この10年で、みんなで「グループ全体をいかに変えていこうか」という気持ちは、社員の中でどんどん高まっています。今回の「伝わるカププロジェクト」では、メンバー全員が頑張ったので、「大変だったでしょう」と聞くと、「楽しかった。もっとやりたい」と言ってくれました。それが何よりです。

—現場の声を実行する先駆的な活動は、どんどん進化しそうです。新たな「社会への恩返し」の取り組みも発案されそうで、これからのリテール銀行のモデルになっていただけ

ば、と期待しています。今日は、ありがとうございました。

インタビュー…
公益社団法人日本ファイナンソロピイ協会
理事長 高橋陽子

※2017年2月24日
株式会社りそなホールディングス本社にて

ありあけ・みきこ

1987年	日興証券（現・SMBC日興証券株式会社）入社
2005年	株式会社りそなホールディングス コーポレートコミュニケーション部 グループリーダー
2013年	同 コーポレートコミュニケーション部長
2015年	同 執行役 コーポレートコミュニケーション部長
2016年	同 執行役 コーポレートコミュニケーション部担当

◆◆第14回「企業フィランソロピー大賞」受賞企業◆◆

企業フィランソロピー大賞

株式会社りそなホールディングス（東京都江東区）

活動名：「りそなキッズマネーアカデミー」

【贈呈理由】

経営陣と一般の社員が同じ志を持ち、次世代を担う子どもたちを育む活動が高く評価されました。

■ 企業フィランソロピー賞

【育てよう 大地とともに賞】

株式会社ストライプインターナショナル（岡山市）

活動名：「one tree プロジェクト」

【概要】2009年より中国・内モンゴル自治区にあるホルチン砂漠にて緑化活動を行なうプロジェクト。苗木代につながる商品の販売を通して、主な顧客である若い世代に環境問題を考えるきっかけを提供し、現地の植樹や剪定作業に参加を希望する社員にはCSRを絡めた企画立案の課題を出し、実際の商品につなげるなどの人材育成に取り組む。

【水と創る企業市民賞】

TOTO株式会社（北九州市）

活動名：「TOTO水環境基金、グリーンボランティア」

【概要】市民団体に助成を行ない、水とくらしの身近な問題解決に貢献する「TOTO水環境基金」と、社員によるグリーンボランティア（環境に関わる社会貢献活動）の推進に取り組む。基金は、ステークホルダーの「お客さま」「株主」「社員」が関わる活動が金額に換算され、算出される。グリーンボランティアのグループ社員参加率は100%。全社を挙げた、ステークホルダーを巻き込んだ取り組み。

【希望のコミュニティ賞】

日本アムウェイ合同会社（東京都渋谷区）

活動名：「Remember HOPE ～東北復興支援プロジェクト」

【概要】2011年の東日本大震災被害者の支援のため、「被災者を決して忘れないこと」「希望を届けること」を名前に込めた本プログラムを2012年より実施。震災後、現場で本当に必要なものは何かを調査。南三陸町より「コミュニティ崩壊の危機」の訴えがあり、2013年に、人々が集える場所として「アムウェイハウス」を建設。以来、福島県や岩手県で3棟を建設し、管理運営を地元の団体に任せ、今後最大12棟を目指す。

【インクルーシブスイーツ賞】

株式会社パレスエンタープライズ パレスホテル大宮（さいたま市）

活動名：「クッキープロジェクト」

【概要】地方都市の中核企業・ホテルとして地元との結びつきを大事にし、埼玉県内の福祉作業所がつくる焼き菓子の品質向上と販路拡大に力を発揮。洋食料理、製菓担当者が養護施設や福祉作業所を訪問し、希望や課題に沿った技術指導を行なうほか、品質の良い焼き菓子をホテル内で販売。2009年より開催する焼き菓子コンテストは、作業所の力の向上と、一般消費者へのPRにつながっている。

※贈呈式の様子は26ページをご覧ください。

※企業名五十音順